

慶雲興

令和 8 年 丙午

新年明けましておめでとうございます!! 令和 8 年 午年が幕を開けました。実は、日蓮聖人がお生まれになつた 1222 年（貞応元年）も午年あたります。それもあつてか、馬には深い思い入れがあつたようです。

日蓮聖人は、晩年の 9 年間を過ごされた身延山を下り、療養のため常陸の温泉を目指したと伝えられています。湯治に向かう最後の旅で日蓮聖人を支えたのが、身延の領主である波木井公から譲られた「くりかけの馬」でした。日蓮聖人が波木井公に宛てられた最後の手紙には、筆をとるのも精一杯な容態の中で、愛馬のことを気にかけ、慈しみのまなざしを向ける一文がみられます。正しい教えを日本に広めるという熱い志と共に、動物への慈愛を持たれていた優しいお人柄が感じられます。



日蓮聖人、最後の旅

さて、令和 8 年の干支は十干が「丙（ひのえ）」、十二支が「午」となり、組み合わせると「丙午（ひのえうま）」となります。「丙」も「午」も「火」の性質をもつており、燃え盛るようなエネルギーで物事が一気に進んだり、表面化したりする。良くも悪くも激しさのある「情熱と変化」の年と伝えられています。

令和 8 年は九星気学においては、中央に一白水星が存在し「姿は変われど、本質は同じ」

第 11 号
安龍山雲澤寺
〒409-2533
身延町清子 1565
☎: 0556-62-0894
✉: anryuzan.untakuji@gmail.com

公式 HP



編集：吉村光翔

という特徴が表れる年になりそうです。自浄作用が働く、復活と再生の年になります。格差社会による不公平をなくそうとしたり、古い因襲を切り捨てて、新しい社会を作ろうとしたりする動きが起ころうです。

一白水星が中央に位置する年なので、「水気」が重要になります。冷害、風水害によるさまざまな影響が心配される一方で、地域によって干害や酷暑被害などが表れる年でもあります。春先の天候は急変しやすく、暑さを感じる日も。夏は酷暑となり、干ばつにも悩ます。夏から大型台風の上陸が予想されます。気温の低さに加え、水害や暴風による被害などに警戒し、浸水対策も万全にしていきましょう。自然災害に不安を感じる一年になりそうですが、こういう時こそ人と人との支え合い、法華経の精神「共に生き共に栄える」という、心を育むように意識していきたいですね。法華経では、誰もが菩薩であると説かれています。他を慈しむ菩薩として、日常から周囲に目を向け声を掛けあつて参りましょう。

さあ、今年はいよいよ大学四年生です。思う存分研鑽を積んで、駿馬のように速く・力強く駆け抜けていきます!!

ハエとウマ

午年ということで、馬にまつわる日蓮聖人のお言葉を紹介させていただきます。

「蒼蠅驥尾（そうようきび）に附（ふ）して万里を渡り、碧羅松頭（へきらしょうとう）に懸（かか）りて千尋（せんじん）を延ぶ。」

日蓮聖人が書かれた書物の中で、最も代表的な著作『立正安國論』に記されたお言葉です。「小さなハエも俊足の馬の尻尾にしがみ付けば、あつという間に遠くへ行くことができ。つたも立派な松にからむことで自然と高いとこへ伸びていく」つまり、正しい教えや人についていけば、自然と人格を高めることができという事をハエと馬、つたと松に例えられたお言葉となります。

ただいま、大学生活の集大成である卒業論文の執筆の真っ最中です。大学に入った理由の 1 つとして「卒論を書く苦しみを味わつてみたい！」という思いが 1 割ほどあつた訳ですが：・先に卒業していく学友たちの疲弊した顔を目の前で見ていると、そんな余裕もなくなりつつあります（汗）

テーマは、日蓮聖人にとって生涯の指針となる師や友は誰であったのか、という内容です。仏教では、自分を正しく導いてくれる人、善き友のことを「善知識」といいます。私たち日蓮宗の僧侶と檀家さんにとっては、まさしく日蓮聖人がそのような方にあたるでしょう。

ところが「そもそも日蓮聖人の善知識は誰なのだろうか？」という疑問から思いついたのがこのテーマです。

皆さんは、これまでの人生を振り返って、自分を導いてくれた師や友人をすぐに思い浮かべることができるでしょうか。仏教では、この善知識という存在について、多くのお経でその重要性を説かれています。

私も気づけば僧侶になつて十数年、住職になつて丸 6 年。まだまだ青バエだと思いつつ、いつまでもそうは言つていられません。自分が駿馬、善知識となる自覚をもつて仏道を歩んでいきたいと思います。改めて皆さまにお聞きします。あなたにとっての善知識はだれですか？だれかの善知識になれてていますか？



図書館で勉強中の住職です。

大学の広報に載せていただきました（笑）

と説かれたのです。

日蓮聖人はお手紙の中で、善知識とは師が一方的になるのではなく、時には弟子が師となることさえある。互いが善知識として高め合う存在であると、その大きさを説かれていました。